

■重なる2時期の墓■

赤子塚（あかごづか）古墳は、小規模な造出し（つくりだし）を有する円墳です。

古墳の時期は5世紀の終わり頃で、允恭天皇陵（いんぎょうてんのうりょう）古墳を主墳とする陪塚（ばいちょう）の1つと考えられます。

古墳を巡る周濠の中から、大量の円筒埴輪と豊富な形象（けいしょう）埴輪が出土したことで知られています。

また、重要な点として、墳丘の下層、すなわち赤子塚古墳が築かれる以前に、墓地であったことがわかっています。

この墓地では、円筒埴輪を棺とするものがありました。

棺として用いられた円筒埴輪は、古市（ふるいち）古墳群の形成が始まる時期のものです。

すなわち、古墳群の造営がはじまった頃の墓地の上に、約100年後、赤子塚古墳が築かれたことがわかります。

古墳群の造営過程と、そこに関わった集団の関係を考えるうえで、興味深い知見だといえるでしょう。